

# 佐賀平野の歴史地理

## ——故郷佐賀と私の地理学——

米倉二郎

私の地理学は佐賀平野が出発点で、それが中国・インドに及んだ。生家は佐賀県三養基郡上峰町八枚付近で、海拔4 m前後の溝渠（俗にクリーク）に囲まれた環濠集落にあり、子供の頃その溝渠に何度か落ちて溺れそうになった。

私は、明治42年（1909）10月に生まれ、大正10年（1921）、前年に創立された旧制三養基中学（現在、佐賀県立三養基高等学校）に入学した。1年生のときに地理を担当したのが伏見義夫であった。伏見は1920年京都帝国大学文学部史学科卒業で、地理学を専攻した専門家であった。のちに長崎大学・岡山大学・大阪商業大学を歴任した。伏見は地理の授業で教科書は使用せず、彼の作ったプリントを教材とした。背振山に登ったり、近くの集落の実地調査、歩測して見取図を作ったりしたことが私に大きな感銘を与えた。（この点は『前波校長と教師たち』三養基高等学校同窓会刊行、昭和63年による）

大正14年（1925）旧制佐賀高等学校理科甲類に入学したが、物理・化学の実験が苦手で、昭和3年（1928）京都帝国大学文学部史学科に入学して地理学を専攻することになった。昭和4年の暮れに恩師小川琢治が『日本地理風俗体系』に掲載する写真をとることにになり、郷里に帰っていた私は写真機担つぎで久留米・佐賀平野・鹿児島まで同伴した。昭和5年卒業論文をどこにしようかと考え、日頃見馴れている所は学問的に書くことは難しいので、

沖縄をテーマにしようと考えた。しかし、小川にいつ卒業するつもりなのか、2～3年では書けないといわれ、佐賀平野の開発を課題にしようと考え、テーマを「筑後川下流平野の開発」とした。（この論文は昭和7年『史林』17巻1・2号に掲載される）

佐賀平野には溝渠（俗にクリークという）が広く分布し、どこから手をつけてよいかわからず、佐賀平野を歩きまわり有明海沿岸に近い犬井道を干潟の上<sup>みおすじ</sup>に溝筋（干潟の上の川）をみて、これが佐賀平野の原始的な形態と考えた。佐賀平野ではメアングーしている溝渠も多いが、直線状の溝渠もみられ、後者は条里制にもとづくことがだんだん判明してきた。

（スライドによる米倉が調査した佐賀平野の条里分布についての説明）

三根・神埼・佐嘉・小城4郡の条里は郡ごとに施行されていることが判明し、4郡とも郡の東端から西に1条、2条と数え、里は吉野ヶ里・諫ヶ里<sup>いさ</sup>・平ヶ里（いずれも神埼郡）のように固有里名であった。木下良が空中写真から発見した大宰府から肥前国府に至る駅の道（東西方向）が吉野ヶ里の北で発掘されて古代の道路跡と確認されたが、このルート（条里の里界線と一致）が佐賀平野における条里の東西の基準線であった。南北の基準線は佐嘉郡の1条と神埼郡の10条がかさなるので、佐嘉郡の1条となっている早稲隈山<sup>わさくま</sup>と『肥前国風土記』神埼郡条にみえる琴木の岡（天皇が丘がないので、丘をつくらせ琴をたてた

ので琴木の岡という)を結ぶ線ではないかとされたが、この点については旧制佐賀高等学校から京都大学文学部史学科地理学専攻と同じ道を進まれた木下良と地元佐賀大学の日野尚志に研究していただき、いっそう正確さをきしていただきたい。

条里は方6町が基礎単位で、その周囲に水路・道路が通る。神埼郡神埼町永歌の集落は方1町の区画が36個入っている条里の村であるが、地割の分布は地域によってかなり異なる。

干拓がいつ頃始まったかは正応5年(1292)の『高城寺文書』に南里(佐賀市南里のことで、川副町との境に位置し、条里の南限に位置することから南里とつけられたのであろう)の南側の干潟を寺に寄進した文書を見つけたが、これは干潟を開発して農地にするため、現在の東古賀・米納津(南里の東、東南に位置する)も文書に出てくる。現在これらの集落は有明から10km内陸部に位置し、この間が700年の間に干拓されたことが判明した。

この干拓をオランダのポルダーと比較するために農学部の農林工学教室の古賀正己に相談したところ、文献をみせていただいた。卒業論文で佐賀平野を取り上げたいといったところ、君はどこの出身かと聞かれ、三養基郡上峰町八枚ですと答えたところ、古賀は久留米出身で日曜ごとに佐賀平野にフナ釣りに行っていたということで、これが縁になって就職はどうするのかとたずねられ、師範学校から口がかかっていますが、もう少し勉強したいと答えたところ、なんなら私の研究室に来ないかということで、昭和6年(1931)卒業後、農学部教室嘱託という名目で月50円もらって一年間自由に研究させていただいた。

農学部では古賀の農村計画、橋本伝左衛門の農業政策を黒正蔵の農業の歴史について聴講し、条里制を歴史上の事件として勉強していたが、古代の農村計画ではないかという観点から観察する見方を教えられた。(昭和7年

『地理論叢一輯』に「農村計画としての条里制」という論文になる)

条里の地割には二つの種類があり、1反(360坪、大閤検地で300坪となる)の内部が30×12歩の半折型と6×60歩の長地型があり、日本史の竹内理三は古い地割は長地が多いので長地先行説を唱えられたが、大化改新詔には30×12歩を1反とし、10反を1町とするとなっており、半折型が先行し、のちに長地型地割にかわったと考えている。それは牛・馬を耕作に使用することによって長地型に変わったと考えている。この問題は最終的にまだ決着がつかない。

条里の1里は方6町の36坪からなり、里の単位となっている。小城郡48ヶ里といわれるように、殆どどの村が〇〇ヶ里といい、条里と村落制が深い関係にあると思われるが、その理由はよくわからない。佐賀平野では条里が徹底的に施行されたのであろう。(佐賀平野に属する基肆・養父・三根・神埼・佐嘉・小城6郡の坪並はすべて共通している)

三日月町には佐賀平野の条里の碑(役場の東約300mに位置する。隣接して高田保馬の銅像がある)を建ててもらっている。陶石の上に小城郡の条里の概要を説明してあるが、町内には条里に由来する4条・5条の集落がある。また、この碑文には方6町からなる三ヶ島里(『和名抄』に記す甕調郷の遺跡地であろう)の明治時代の地籍図も示されている。現在圃場整備によって若干変っているが、大体元の姿が残っている。

昭和11年(1936)中国を旅行し、上海から蘇州にまわり、町の北にそびえる寺の塔から写真をとろうと思い、一番高い所からとるのを遠慮して一階下でとっていると私服の警官が上からとるともっと良くとれると親切にしてくれた。

蘇州は呉の時代から開かれた古い都で石刻された2mくらいの地図があつて、2,000分の1~3,000分の1の縮尺で殆んど1軒1軒の家

が記載されている。10年前に再訪したが、博物館用の拓本が1つ、もう1つ予備があり、譲ってもらうことにして600元（当時3万円）で買い求め、現在、広島大学文学部地理学教室に寄贈してある。誰か研究してくれることを期待している。

次に江南に興味を持ったが、その理由は溝が縦横に走っているからである。上海の北西約70kmにある嘉定県の塩鉄塘は唐代（大和年間827-835に築城）に出来た水運を通す運河があり、江南では5里7里にして一縦浦（南北方向の幹線水路）をなし、また7里あるいは10里にして横塘（東西方向の幹線水路）をなす。これが水路網の基本で、その間に等間隔で平行して水路があり、嘉定県はこの幹線水路の十字路にあたっている。佐賀平野の溝渠と比較して上海のクリークは水運が中心となっていた。

戦争中は南方にいた。タイ・ビルマ・インドネシアなどインド文化が基調で、ベトナムだけが中国文化の影響を強く受けている。戦後、中国の調査が出来ず、インドにでかけることにした。

ガンジス川の河口のベンガル平野は海岸から130km位内陸までクリークがあって塩入川と

なっている。江南のクリーク、佐賀平野の溝渠と比較してこちらが新しい開発である。地盤が沈下して、120年前の地図と比較して殆んど同じである。ベンガルのクリーク地帯は20万km<sup>2</sup>、江南は10万km<sup>2</sup>で、前者は日本国の面積の半分が入るほどの大きさであるが、まだ未開発で、これから開発されなければならない。私の地理学は佐賀平野に始まり、中国の江南、インドに及ぶ。まとめることが出来ず今日に至っているが、優れた後進の若い研究者を養成して、それらの方々の将来の研究を期待している。

この特別発表の要旨は、当日、収録されたテープを基に、日野尚志が書き起こしたものである。文中、敬称はすべて省略した。また、一部、先生の当日の発表にない文章を、他の機会に発表された論文などで勝手に補足したが、ご海容願いたい。なお、発表会后、二人の質問があった。一つは佐賀平野における弥生時代の海岸線について、もう一つは筑後川上流域（日田盆地）における河岸段丘か自然堤防かについての質問で、これらについて先生が詳しく説明されて、特別発表は終了した。

文責：日野尚志（佐賀大）